

日 本 語 3

木戸 光子・和氣 圭子

Japanese 3

KIDO Mitsuko, WAKI Keiko

1. コース概要

担当教員：木戸光子・大場美和子・小河原世津・金久保紀子・和氣圭子

授業時数：必修科目として「文型・会話」が週4コマ、「作文」「読解」「聴解」が各週1コマで、計週7コマ（75分授業、10週）ある。また、選択科目として「漢字」1コマがとれる。

登録者数：1学期28名、2学期32名。

対象：初級日本語（250～350時間ぐらい）の学習を終えた者。

目的：中級の前期レベルの日本語の運用力をつける。

なお、日本語3は、「文型・文法」の教科書『日本語中級 文型表現練習1（第3版）』、および、「文型・文法4」の教科書『日本語中級 文型表現練習2（改訂版）』を作成した教材開発グループから引き継いだコースであり、教材および授業運営方法は昨年2002年度のものほとんど受け継いでいる。したがって、教材の理念や構成、教材に基づく授業運営の詳細については「文型・文法4」を参照してもらいたい。

教材：「文型・会話」の教材は次の教科書と宿題プリント、テープである。「作文」「読解」「聴解」は教科書に準拠した内容のプリント教材を使っている。

1) 教科書 『日本語中級 文型表現練習1（第3版）』（小口叔枝・金久保紀子・加納千恵子・衣川隆生・戸田貴子・長能宏子、筑波大学留学生センター、2002年）

第1課 紹介する

第2課 依頼する・許可を求める・断る

第3課 事実・出来事を報告する

第4課 調査報告（1）

2) 宿題プリントー各課の各ユニットごとに【文法チェック】【書いてみよう】

3) テープー教科書の【聞き取ってみよう】【聞いてみよう】【話してみよう】の会話

評価：以下のとおり100%で評価する。ただし、出席60%以上出席しなければ不合格になる。

「文型・会話」

クイズ (L1/L2/L3/L4) 4回	6%×4=24%
テスト (L1-L4) 1回	10%×1=10%
発表 (L1/L2/L3/L4) 4回	6%×4=24%
「作文」「読解」「聴解」	14%×3=42%
計	100%

2. 「文型・会話」「作文」「読解」「聴解」の授業

2.1 「文型・会話」(担当：木戸・金久保・大場・小河原)

授業概要：

8-9コマで一課進み、授業の準備・進め方・提出物は次のとおりである。

1) オリエンテーションと準備活動

課の目標を示し、学習すべきことを確認する。

2) 文法チェックと文法解説

課で学習する文法の知識の有無を確認し、特に、学習者が知らないものやまちがいやすいものについて解説する。

3) 表現練習 ユニット1-4

課で学習する項目(主に文型)について、主に口頭での運用練習をしながら学んでいく。授業前に宿題としてそのユニットの【文法チェック】をし、授業で宿題の答合わせをしながら学習すべき文型の確認をする。そして、授業では、主に4-6名のグループになって会話練習を行う。この時、各グループに日本語ボランティア1名に入ってもらい、会話練習の主導役や会話の相手をしてもらう。授業後そのユニットの【書いてみよう】の宿題をして、授業で口頭練習した文型が使えるようになったかを文章や会話を書くことで確認をする。

4) 文法クイズ

課の終わりに文型の知識の定着をはかるため、30分程度の文法クイズを行う。

5) 発表

課の終わりに、まとめの活動として、課の内容に沿った発表を行う。

1課 自己紹介

2課 教師および友人への依頼のロールプレイ

3 課 ニュース報告

4 課 ポスター発表形式での調査報告

授業の特色：

まず、教科書を通してコース全体としての内容の統一性がとれる。「文型・会話」を中心に、「作文」「読解」「聴解」と内容の関連性がはっきりしているのも、同じ内容を様々な技能で学習できる。例えば、会話練習でわからなくても、作文練習でわかるようになる、などの学習の利点がある。

次に、日本語ボランティアの協力により様々な面で良い刺激がある。教師と学習者以外の他者が授業に来ることにより、教室日本語でない日本語に接し、練習のための練習ではなく実際に日本語でコミュニケーションする感覚で会話練習ができる。また、日本語ボランティアにとっても、大学の授業を受ける側から教える側に立つことにより、大学教育に積極的に貢献できる。

また、メーリングリストやWebページの授業報告を活用しており、複数の教員間で授業の流れを共有しやすくなっている。

問題点：

まず、学習のニーズがかなり異なる者を1つのコースに含むために様々な問題が起こっている。大学に入ってきた留学生なら誰でも受け入れるため、大学生・大学院生、短期留学生・研究生・正規生など学習目的の異なる複数の種類の留学生がコースに含まれる。つまり、研究・日常生活日本語・文化体験など日本語学習の目的が様々な者が1つのコースに混在している。そこで、どんな留学生でもある程度学習できるように、教科書の前半は日常生活に役立つもの、後半はアカデミックスキルに関するものとしている。しかし、そのために、逆に学習目標があいまいなコース内容になっている。これは日本語の技能のレベル別で受講するコースを分ける今の日本語補講コースの方法に限界があると考えられる。

次に、語学の運用練習をするには1クラス30名前後ではクラスサイズが大きすぎる。そのため、発音学習など個々の学習者の抱える問題点にあまり対処できない。クラスサイズが大きき上に、その中の学習者の日本語力にかなり差があるため、1クラスで同じ内容を学習しても、消化しきれない者、あるいは簡単すぎて勉強にならない者に分かれる。

また、教科書は運用能力向上を目指して開発されたものとのことだが、実際には文型中心の学習になっている。教科書に沿って授業をすると、文型学習が目標なのか、依頼できることが目標なのか、他のことが目標なのか、あいまいになってしまう。例えば、2課の依頼表現では、複数の文型をつなぎ合わせて言えるだけでは相手とのスムーズなやりとりはできない。しかし、文型以外の会話に関する知識やストラテジーは教科書には書かれていないので、

もしよいコミュニケーションができる会話力向上をめざすなら、授業で会話に関わる知識や技能をかなり補う必要がある。

2. 2 「作文」 (担当: 木戸)

授業概要:

教科書の各課の内容に従い、紹介、手紙、報告の書き方を学習する。教材は、衣川隆生氏が作成した作文教材を1部改変して使っている。評価は、課題作文10%、レポート4% (1学期は作文テスト) で計14%である。

授業のやり方は、1週目の月曜の授業で作文1のオリエンテーションをし、金曜に宿題の作文1を出し、次の週の月曜で作文1のフィードバックと作文2のオリエンテーションを行う、という方法である。毎週出される宿題の課題作文をこなすことを通して、宿題添削と解説というフィードバックにより、学習者は、紹介文、手紙、報告の書き方を学ぶ。

授業の特色:

「文型・会話」の発表と関連した作文を書く。特に、1課 自己紹介、3課 ニュース、4課 調査報告 は、発表原稿を「作文」の授業である程度書いて添削した上で、「文型・会話」の発表を行うようにしている。こうすることで、学習者は異なる技能の授業の課題でも、関連した課題として学習できる。4課の調査報告について「作文」のレポートと発表原稿が関連した課題であることの例として、「文型・会話」の授業の発表準備で配ったチェックシートを次に挙げる。

2003.11.18 日本語3

4 課発表準備のためのチェックシート

準備がおわったら、をチェックしましょう。

- ポスター1枚 (単語リスト、必要な人だけ)
- レポート (ポスター発表と同じ内容)

ステップ1 ポスター

- 発表のタイトル、自分の名前を書いたか。
 - キーワード・キーセンテンスを書いたか。
 - 図表を書いたか。
- (むずかしいことばの単語リストをつくったか。)

ステップ2 レポート

タイトル
名前
1. はじめに
2. 調査概要
3. 調査結果
4. 考察
参考文献

- 「1. はじめに」に問題を書いたか。
どうしてその問題をえらんだか。
- 「2. 調査概要」をぜんぶ書いたか。
いつ、だれ／どこが、だれに対して、
何のために、どんな方法で、何を調査したか。
- 「3. 調査結果」をくわしく書いたか。
数字の説明は正しいか。
- 「4. 考察」で、調査結果から考えたことや
思ったことを書いたか。
反対意見について考えたか。
- 図表に番号とタイトルを書いたか。

例 図1 日本の人口の変化

表1 いじめについての父母の意識

ステップ3 発表の練習

1人で、ペア・グループでたくさん練習しましょう。

- 発表のしかたは聞く人にわかりやすいか。
- 発音、イントネーションはわかりやすいか。
- 話すスピードはよいか。
- 発表の内容は聞く人にわかってもらえたか。
- 質問に答えられたか。

- たくさん発表の練習をしたか。何回したか。
- 他の人に発表の練習をチェックしてもらったか。

- 発音がよくわからない人は、発表のテープを日本語ボランティアにつくってもらって
ください。日本語ボランティアはレポートを読んでテープに録音してください。

問題点：

課題作文を提出しなくなる学習者が出てくる。毎週作文を書いて提出するのは負担に思う学習者もいるようである。書かなければ上達しないが、しかし書く動機づけをどう継続させるかがむずかしい。

2. 3 「読解」 (担当：木戸)

授業概要：

教科書の各課の内容に従い、紹介文、依頼の手紙、事件や出来事の記事、調査報告を読む。加納千恵子氏が作成した読解教材を使っている。評価は、その日の授業の後半に読んだ読解タスクシート10%、読解テスト4%で、計14%である。

授業のやり方は、1課につき、1週目に基本読解練習、2週目に応用読解練習を行う、というように同じ種類の文章を複数読んでいく方法である。まず、読解のための説明の後、読解タスクを各人が読んで設問に答える。授業中に終わらなかつたら宿題になる。次の授業では、前回の読解タスクの返却と解答、解説をしてから、次の読解練習をする。

問題点：

学習者の語彙力により、教材が速く読め理解も比較的よい者からかなり読むのに時間がかかる者まで様々なレベルの学習者がいる。特に、非漢字圏の学習者は漢字語彙の意味を調べるだけでかなり時間をとられている。

2. 4 「聴解」 (担当：和氣)

授業概要：

内容は文型・会話のクラスに沿い、次のように行った。

- 1 課：自己紹介
- 2 課：依頼・許可求めの会話
- 3 課：ニュース
- 4 課：調査報告

音声教材は主に『日本語中級文型表現練習Ⅰ』用に作成された聴解練習のテープを用いた。3課、4課では実際のテレビニュースを用いた聞き取りも行った。タスクシートなどは授業の都度、配布した。

授業は 1) 全員で一斉に聞き取り、2) LLブースを用いた個人作業、の2部に分けて進めた。進め方はおよそ次の通りである。

- | | |
|---------|--|
| 1) 一斉作業 | 前回のディクテーションの返却・フィードバック
その回の導入、語句の確認、おおよその内容聞き取り |
| 2) 個人作業 | 内容聞き取りの続き、部分ディクテーション |

最後の部分ディクテーションは、内容聞き取りが終わってチェックが済んだ人から作業に入らせた。終わらない場合は宿題とし、次の授業で返却・フィードバックを行った。

評価：

毎回の課題（ディクテーション）提出状況（2.8%）、課題の評価（1.4%）、最終回に行うテスト（9.8%）の計 14%で評価した。最終テストは、ほとんど授業の教材から出題するので、まじめにクラスに参加していれば7割以上取れるものである。

問題点・反省点：

毎回 20 名以上の学生が参加するが、学生間の聴解能力の差はかなり大きい。一斉作業ではどれくらい自分の力で聞き取っているのかチェックできないため、個人作業を取り入れている。個人作業中に教室内を見回って、タスクシートのチェックや聞き取れない部分についてのアドバイスなどをするのだが、教師 1 人では限界があり、積極的にたずねてくる学生に時間を取られてしまいがちである。ボランティア学生に手伝ってもらうことも考えたいが、会話クラスのボランティアと異なり、チェック・アドバイスという教師とほぼ同じ役割を担ってもらうことになるので、どういう人に頼めばいいのか、どういう形式で手伝ってもらうか、注意が必要になるだろう。